

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月15日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20320101

研究課題名（和文） 江川代官所文書の総合的研究

研究課題名（英文） The general approaches to the documents of Egawa-daikansho

研究代表者

湯之上 隆（YUNOUE TAKASHI）

静岡大学・人文学部・教授

研究者番号：30111800

研究成果の概要（和文）：

静岡県を調査主体とする江川文庫史料西蔵調査事業と連携して調査研究を進めた。平成24年3月刊行の静岡県文化財調査報告書第63集『江川文庫古文書史料調査報告書』4冊により、約30,000点の古文書を目録化した。本研究の前提となる第1次調査分の約20,000点と合わせた約50,000点にのぼる古文書調査はほぼ完了し、本研究の所期の目的は完遂した。江川文庫研究会を5回開催し、調査研究成果の公表と情報の共有を図った。国文学研究資料館の「伊豆韮山江川家文書データベース」により、調査成果を公開した。

研究成果の概要（英文）：

We researched in close association with research projects of the Egawa family papers in a west storehouse which were mainly carried by Shizuoka Prefecture. We published Proceedings of the cultural heritages in Shizuoka Prefecture No.63“Proceedings of research of the Egawa family papers on”4 vols(2012) and catalogued about 30,000 documents. We almost finished documents research of a total of 50,000 consisted of two parts. One is present 30,000 documents and another is 20,000 which had already finished in early first research projects. We held seminar of the Egawa Collection in five times and published accomplishments and in formation of our research. We made up and published“Egawa family papers database,Nirayama,the Province of Izu” in the National Institute of Japanese Literature. Therefore we almost accomplished our research plans.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2009年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
年度			
総計	14,300,000	4,290,000	18,590,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：近世史、江川文庫、軍事近代化、江川英龍（坦庵）、台場、反射炉、代官

## 1. 研究開始当初の背景

幕末期の江川英龍（1801-55、号は坦庵）を代表的人物とする江川家は、中世領主の系譜を引き、葦山屋敷を本拠として、江戸中後期は世襲代官、明治に入っても、英龍の子英武が葦山県知事をつとめ、その重臣で豊富な人脈をもって活動した柏木総蔵が足柄県令になるといふ、日本近世・近代史上の全国レベルの名家である。

江川家の家史編纂に伴う資料整理は、英龍の父英毅の時、幕府の寛政重修諸家譜の編纂に関わる家譜提出とともに着手され、さらに、英龍の子英武によって継承された。英武は岩倉使節団の随行留学生としてアメリカに渡ったのち、一行とは別れて滞米し、この時撮影した貴重なフィルムが江川家に残されている。英武は、明治12年（1879）に帰国後、内務省に奉職したが、明治19年、自身の病気もあり、退職して葦山に退隠し、英龍の事績研究とともに、伝来の書画・典籍の分類整理や表装、古文書の整理と目録の作成作業などを本格的に推進したが、英武の死によって中断してしまった。

戦後、江川家文書の体系的調査に初めて取り組もうとしたのは国立史料館（現在は国文学研究資料館）である。古文書の一部には「史料館」のラベルが貼付され、そのうちの一部は「史料館」の封筒に収められて、3,400点の調査カードが作成されている。

国立史料館は、幕府勘定奉行所からの指令を記した「御触留」「御証文類」の他、「御用留」や勘定奉行所への伺書の帳簿類を中心に、3回にわたってマイクロフィルム撮影をし、その数は94リール、62,976コマ、紙焼き602冊にのぼる。これらは、江川家当主・澁二氏の意向により、従来の事前許可制を変更して一般公開された。

他方、戸羽山瀚氏は『江川坦庵全集』（江川坦庵全集刊行会、昭和29年。昭和46年再刊、

巖南堂書店）を刊行したが、反射炉・海防・造船・台場等に関する史料は多いものの、収録された古文書は少ない。

また地元の仲田正之氏や駒澤大学古文書研究会により調査が行われ、3000番までの目録が残されている。なお、1970年代初めには、洋学史研究会によって蘭書の調査が行われているが、その成果は公表されるに至っていない。

さらに、葦山町史編纂のための調査が継続して実施され、『葦山町史』第6巻上（江川氏の成立 前期葦山代官 中期葦山代官 後期葦山代官、平成4年）・下（後期葦山代官 江川英龍の事蹟 葦山県・足柄県、平成6年）として刊行された。また、静岡県史編纂のための調査も行われ、史料編に一部が収録された（史料編16、近現代一、平成元年）。

しかし、これらの調査では、多くの制約から古文書全点にわたる調査が実施されることはなく、全容の把握には至らなかった。

14年度から文化庁と静岡県・葦山町（のち合併して伊豆の国市）の財政支援をうけて開始された総合調査により、古文書については、約20,000点の整理を終了し、18年度末には『江川文庫古文書史料調査報告書』（全3冊、書画・典籍・工芸品・武器類、古文書（一）（二））を刊行した。しかし、古文書の調査は全体の半分以上が残されたままであった。

## 2. 研究の目的

中世以来の長い歴史をもつ江川家には、古文書・書画・典籍（和書・漢籍・洋書）・工芸・染織等、膨大な量の史料が残されている。本研究課題の目的は、大きく2点にまとめられる。(1) それらの史料群のうち、50,000点に達すると推定している、江川家に伝来した中世から近世にわたる江川家文書全点を調査し、調査カードにもとづいて目録を作成したうえで、データベース化の作業を行いながら、全

容を初めて明らかにし、情報公開を進めることである。

(2) その成果にもとづき、江川家文書の最も重要な特徴を示す、しかも新出の幕末維新期史料を中心に、相互に密接に関連する諸課題を分析することにより、従来十分な研究蓄積をもたない代官所文書の内容や特質、歴史的意義および地方行政・軍事の近代化との関連を明らかにすることにある。

具体的には、次の4点を挙げる。

① 従来、必ずしも十分に明らかにされていなかった幕府勘定奉行所と代官との関係を通じて、幕府行財政の実態と構造を具体的に解明する。

② 高島秋帆から高島流砲術の伝授をうけ、幕府鉄砲方を兼帯した江川英龍の鉄砲研究と製造を検討し、幕府側の軍事技術、海防・軍事政策を分析することにより、日本近代化の経緯を幕府側から明らかにする。

③ 「御触留」「御証書類」「御用留」など帳簿類の詳細な分析により、代官江川家による広汎な領域にわたる情報収集システムを究明する。

④ 英龍に代表される旗本江川氏の教養ある文人としての活動—書画・音楽・文芸（和歌・俳諧等）—の実態を分析する。

### 3. 研究の方法

(1) 研究代表者と研究分担者による調査体制は、次の任務分担を組み合わせながらも、全員で共同して実施する方式をとった。

総括及び中世文書の調査・分析：湯之上 隆  
地方・幕府行財政文書の調査・分析：大塚 英二、大友 一雄、杉本 史子

洋学関係史料の調査・分析：横山 伊徳

軍事関係史料の調査・分析：保谷 徹

文学関係史料の調査・分析：鈴木 淳

日本とイギリスの行政近代化の比較分析：岩井 淳

この他、研究協力者として、宮地正人・江

川文庫古文書史料調査委員会委員長（東京大学名誉教授）を始め、これまで江川文庫調査に関わってきて習熟している、江川文庫古文書史料調査委員会に参加した多くの方々を依頼した。

調査は、これまでの伊豆韮山・江川邸での合宿による共同調査と各人の個別調査、調査ごとのミーティングという形式で実施した。

(2) 50,000点以上の古文書の整理・活用のためには、調査成果のデータベース化が重要な課題となるので、この作業に関しては、1960年代、江川家文書を調査・撮影し、多くの写真帳を作成した国立史料館を継承する国文学研究資料館がその責任主体となり、本研究グループとの協議を重ねて、実現を目指した。

第1次調査分のデータベース作成経費は、平成18年度に大友一雄氏ら関係者の努力によって実現をみたように、国文学研究資料館から人間文化研究機構のデータベース作成経費枠に応募して賄い、学界で最も必要なデータベースとして良質な江川家文書データベースを完成させ、国文学研究資料館のホームページで公開した。

### 4. 研究成果

平成20年度以来、静岡県が調査主体となっている江川文庫調査委員会と連携して、毎年5回程度の全体調査および研究代表者・分担者・協力者による個別調査を実施した。調査は伊豆の国市・江川邸で、調査協力者の支援も得て、古文書を中心に、書跡・典籍・工芸についても実施した他、研究分担者による古写真約1,700点の調査・写真撮影も行った。併せて、江川文庫調査委員会による第1次調査で刊行した報告書の点検作業も実施した。

その結果、平成24年3月、静岡県文化財調査報告書第63集『江川文庫古文書史

料調査報告書』4冊（四一古文書（三）、417頁、五一古文書(四)、471頁、六一古文書(五)、415頁、七一古写真・染織、182頁）を刊行して、約30,000点の古文書を目録化し、第1次分の約20,000点と合わせた約50,000点にのぼる古文書調査はほぼ完了し、本研究の所期の目的は完遂するに至った。なお、調書情報はエクセルデータとして整備しており、既に国文学研究資料館ホームページで公開している第一次調査分とともに、できるだけ早い全点の公開のため、国文学研究資料館と協議している。

研究については、重点的な取り組みを推進し、情報の共有と研究の深化を図るため、江川文庫研究会を発足させ、講演・報告を東京大学福武ホールで開催した。

第1回、2008/12/6、記念講演、講師、宮地正人氏（東京大学名誉教授、研究協力者）、演題「江川家史料研究の課題」。

第2回、2009/2/20、報告者、戸森麻衣子氏（日本学術振興会特別研究員、研究協力者）、題目「代官江川氏の手代と家来の歴史的変遷」。

第3回、2009/10/9、報告者、有光友學氏（横浜国立大学名誉教授）、題目「江川文庫所蔵 後北条氏発給文書等の紹介」。

第4回、2010/12/7、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター・同古写真研究プロジェクトと共催。報告者、谷昭佳氏（東京大学史料編纂所准教授）、題目「幕末・明治初期の写真史における江川文庫古写真コレクションの位置」。

第5回、2011/12/2、報告者、大友一雄氏（国文学研究資料館教授、研究分担者）、題目「江川代官所の機能と記録」。

研究の目的の一つとした成果公開に関わり、国文学研究資料館が公開する

「伊豆韮山江川家文書データベース」に反映させて、古文書 20,425 点についての情報と古文書 1,800 点の画像を、インターネットを通じて本格的に公開した。

また、研究計画に掲げた、江川文庫調査の状況や意義を周知するための取り組みとして、静岡新聞平成 22 年 1 月 16 日～6 月 26 日夕刊に、研究代表者・分担者・調査協力者の執筆による「歴史の息遣い—江川文庫調査から」と題する 26 回にわたる連載記事を掲載し、県民の関心を喚起することとなった。

さらに、調査研究成果の公開の一環として、「輝く静岡の先人展 江川垣庵とゆかりの人々」を、静岡県内 2 会場（2011 年 8 月 1 日～20 日、静岡市グランシップ、10 月 1 日～30 日、沼津市明治史料館）で開催し、多数の来場者があった。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

- ① 杉本史子、都市空間のなかの江戸城（シンポジウム「江戸と江戸城」）、東京大学史料編纂所研究紀要 22 号、査読無、2012、231-235
- ② 杉本史子、国絵図復元—巨大絵図制作の技術—、東京藝術大学美術学部紀要 50 号、査読有、2012、掲載決定
- ③ 湯之上隆、六所家旧蔵中世文書の紹介、六所家総合調査だより 9 号、査読無、2011、1-16
- ④ 保谷徹、近世近代移行期の軍隊と輜重、歴史学研究 882 号、査読有、2011、14-25
- ⑤ 保谷徹、江川英武の米国留学中写真—伊豆韮山・江川文庫古写真調査報告、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信 55 号、査読無、2011、2-9
- ⑥ 岩井淳、世界史認識とアジアのミニ・システム—海洋史観と港市国家から考える、

文化と哲学28号、査読無、2011、1-20

- ⑦ 岩井淳、17世紀ブリテンの複合国家と他者認識—ウェールズとアイルランドの場合—、歴史学研究885号、査読有、2011、175-184
- ⑧ 大塚英二、近世初期有力竈屋の存在形態—瀬戸竈屋三右衛門と三河石飛村伊藤家—、豊田市史研究2号、査読無、2011、19-30
- ⑨ 鈴木淳、谷文晁と『江川家蒐集書画帖』、『シンポジウム 古典籍の形態・図像と本文』、国文学研究資料館、査読無、2011、27-36
- ⑩ 大塚英二、尾張藩御用商人菱屋太兵衛家に関する若干の史料について、愛知県立大学大学院国際文化研究科論集11号、査読無、2010、29-41
- ⑪ 横山伊徳、史料編纂とデジタル化のメタヒストリー、人工知能学会誌25(1)号、査読有、2010、5-10
- ⑫ 横山伊徳、日本史研究データベースはどこへ行こうとしているのか、日本歴史740号、査読有、2010、2-8
- ⑬ 大塚英二、近世期の土地利用と地域利害の相克、愛知県立大学文学部論集57号、査読無、2009、75-105
- ⑭ 鈴木淳、北尾重政画『花鳥写真図彙』考—浮世絵師による花鳥画絵本の試み—、かがみ39号(大東急記念文庫)、査読無、2009、83-118
- ⑮ 岩井淳、オリヴァ・クロムウエル研究の新動向、静岡大学人文学部『人文論集』60号の1、査読無、2009、33-50

[学会発表] (計 9 件)

- ① 杉本史子、絵図の世界によろこそ—江戸時代の空間表現、平成23年度企画展「絵図から見たいちかわ—館蔵資料を中心に—」(招待講演)、2012/3/18、市立市川歴史博物館 (千葉県)
- ② 杉本史子、近世日本裁判再考—社会と裁

判、間文化研究機構連携研究「人間文化資源の総合的研究」研究班「9-19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究」第2回国際研究会「前近代社会における秩序維持の<道具>：紛争処理の文書」、2011/12/9、アンカラ大学 (トルコ共和国)

- ③ 杉本史子、国絵図と近世社会、Symposium on the Pre-Modern Japanese Collections at Yale University、2011/10/7、イエール大学バイネッキ図書館 (アメリカ合衆国)
- ④ 岩井淳、革命か内戦か—17世紀から現在までの研究動向—、2011年度日本ピューリタニズム学会大会、2011/6/18、聖学院大学 (埼玉県)
- ⑤ 岩井淳、17世紀ブリテンの複合国家と他者認識—ウェールズとアイルランドの場合—、2011年度歴史学研究会大会、2011/5/22、青山学院大学 (東京都)
- ⑥ 鈴木淳、谷文晁と『江川家蒐集書画帖』、シンポジウム：古典籍の形態・図像と本文—日中書物史の比較研究—、2010/12/23、中国国家図書館 (中国北京)
- ⑦ 保谷徹、江戸湾海防と江川太郎左衛門—伊豆葦山・江川文庫調査から—、開国史シンポジウム：幕末・明治の沿岸防衛の歴史、2010/12/5、横須賀芸術劇場 (神奈川県)
- ⑧ 岩井淳、ピューリタン革命の三つの顔、イギリス革命史研究会、2009/11/14、明治学院大学 (東京都)
- ⑨ 湯之上隆、伊豆葦山・江川文庫調査から見てきたもの、静岡大学日本史読書会、2008/11/15、静岡大学 (静岡県)

[図書] (計 9 件)

- ① 大塚英二 (共著)、国境の歴史文化、清文堂出版、2012、337(251-283)
- ② 保谷徹 (共編)、静岡県教育委員会、静岡県文化財調査報告集第64集『江川文庫古文書史料調査報告書七—古写真・染織—』、

2012、182

- ③ 保谷徹 (共著)、有志舎、明治維新史学会編『講座明治維新』3・維新政権の創設、2011、315(21-56)
- ④ 横山伊徳 (共著)、つながる図書館・博物館・文書館、東京大学出版会、2011、272(107-132)
- ⑤ 鈴木淳、岩波書店、江戸のみやび、2010、320
- ⑥ 保谷徹、吉川弘文館、幕末日本と対外戦争の危機、2010、232
- ⑦ 杉本史子 (共著)、吉川弘文館、日本の対外関係6 近世的社会の成熟、2010、332(273-290)
- ⑧ 岩井淳、山川出版社、ピューリタン革命と複合国家、2010、90
- ⑨ 大友一雄 (共著)、岩田書院、中近世アーカイブズの多国間比較、2009、437(29-40)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

湯之上 隆 (YUNOUE TAKASHI)  
静岡大学・人文学部・教授  
研究者番号：30111800

### (2) 研究分担者

鈴木 淳 (SUZUKI JUN)  
国文学研究資料館・研究部・教授  
研究者番号：40162953  
大塚 英二 (OTUKA EIJI)  
愛知県立大学・日本文化学部・教授  
研究者番号：40201975  
大友 一雄 (OHTOMO KAZUO)  
国文学研究資料館・研究部・教授  
研究者番号：30169007  
保谷 徹 (HOYA TORU)  
東京大学・史料編纂所・教授  
研究者番号：60195518  
岩井 淳 (IWAI JUN)  
静岡大学・人文学部・教授  
研究者番号：70201944  
杉本 史子 (SUGIMOTO FUMIKO)  
東京大学・史料編纂所・教授  
研究者番号：10187669

横山 伊徳 (YOKOYAMA YOSHINORI)  
東京大学・史料編纂所・教授  
研究者番号：90143536

### (3) 連携研究者 ( )

研究者番号：